

ハートフル

みきしこ ぼうし
三木市子どもいじめ防止センターだより

かんが
～きこえる いっしょに考えよう～



「大人にできること」って何だろう…

いよいよ今年4月から、民法で定める成年年齢が20歳から18歳に引き下げられます。しかし、「大人への仲間入り」と言っても、契約などの知識や経験はまだこれからなので、トラブルに巻き込まれないよう、本人の自覚とまわりのサポートが不可欠です。

ところで、大人には、子どもたちの安全・安心な暮らしを守り、成長と自立を支えるという大事な役割があります。昨年、住民の方から当センターあてに学校外での子どものいじめが疑われる事案の情報提供が複数あり、すばやい対応ができました。このように保護者や地域の人々が、学校や関係機関に報告・連絡・相談することによって、子どもをいじめから救ったり、いじめを止めさせたりするきっかけとなることがあります。多くの大人が注意深く見守り、手を差し伸べることは、いじめを許さないという大人のゆるぎない姿勢を行動で示すことになり、いじめの防止や抑止にもつながります。

右のような「反いじめルール」を子どもと共有し、学校・保護者・地域の大人たちが協力して子どもたちをサポートする体制づくりが一層求められています。

- 1 私たちは、他の人をいじめません。
- 2 私たちは、いじめられている人を助けます。
- 3 私たちは、一人ぼっちの人を仲間に入れます。
- 4 私たちは、もしも誰かがいじめられていれば、それを学校や家の大人に話します。

(「オルヴェウス・いじめ防止プログラム」より)

また、いじめは、大人の世界でも起こっています。厚生労働省の個別労働紛争に関する調査(令和2年度)によれば、「いじめ・嫌がらせ(ハラスメント)に関するもの」が9年連続で相談件数のトップとなっています。法律(※)により、今年4月から、職場での「いじめ・嫌がらせ」を防止するための措置が中小企業でも義務付けられます。いじめを生まない職場づくりのためには、一人一人の確かな理解と協力が欠かせません。

いじめはどんな集団や組織、共同体でもおこりうる社会全体の問題です。大人の言動や関わり方が子どものいじめを誘発することもあります。すべての大人が、よきモデルとして子どもとの関わりを深めるとともに、身近なところからよりよい人間関係を築いていくことが求められているのです。



※「パワーハラ防止法」(改正労働施策総合推進法のこと) パワーハラスメントを防止するための方針の明確化、啓発、相談窓口の設置、発生時の適切な対応等を企業に義務付けている。

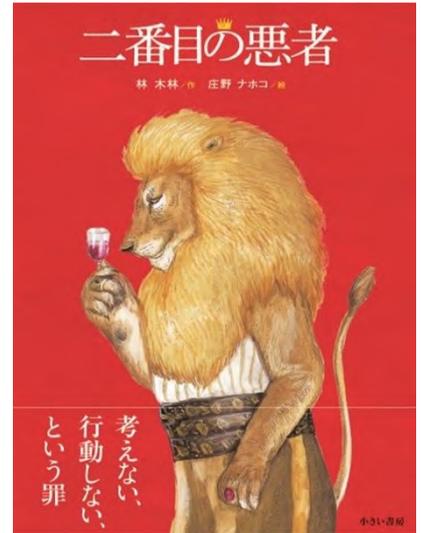
二番目に悪いのは、いったい誰でしょう？

いじめについていろいろと考えたり、親子で話したいと思ったりした時、絵本が大きな助けになることがあります。また、絵本が実際に身近なところでいじめが起こった時の考え方や対処法のヒントを与えてくれることもあります。そこで、大人にとっても、子ども(小学生以上)にとっても大いに参考となるような絵本を紹介します。

それは、2014年に出版された、林木林さん作・庄野ナホコさん絵の『二番目の悪者』という絵本です。

【出版社からの紹介(あらすじ)】

金色のたてがみを持つ金のライオンは、一国の王になった。自分こそが王にふさわしいと思っていた。ところが、街はずれに住む優しい銀のライオンが「次の王様候補」と噂に聞く。ある日、金のライオンはとんでもないことを始めた――。登場するのは動物ばかり。人間はひとりも出てきません。けれど1ページ目はこの言葉から始まります。
「これが全て作り話だと言い切れるだろうか」



『二番目の悪者』
林木林 作・庄野ナホコ 絵
(小さい書房)

金のライオンが、自分が王になろうとして始めた「とんでもないこと」とは、銀のライオンをおとしめるために悪いうわさ(根拠のないデマ)を流すことなのです。最初、住民の動物たちはうわさを信じようとしませんでした。しかし、住民から住民に伝えられるにつれて、だんだんうわさが本当のこのように語られ広まっていきます。一方の心優しい銀のライオンは、自分に対する悪いうわさの存在を知っても何も言わず、誤解がとけるのをじっと待っていました。そして、物語はとうとう取り返しのつかない結末を迎えることになるのです。

これは、金のライオンだけが悪かったのでしょうか？はたして二番目に悪いと考えられるのはいったい誰なのでしょう？

絵本の表紙帯には、作者からのメッセージである「考えない、行動しない、という罪」とあります。あやふやな情報がネット上で飛び交う今の社会の中で、何が真実なのかを自分で見極めて行動することがより一層重要となっています。さらに私たちは、悪意にたいして空気に流され、無関心・傍観者でいられるのでしょうか。うわさが出た時やいじめに気づいた時など、自分自身の振る舞い方として、どうあればよいかを大人と子どもが一緒になって考えてみたいものです。

いじめの「被害者」にも、「加害者」にもならない！

本誌23号で、『子ども六法』(弘文堂)という書籍を紹介しました。法律を子ども向けにわかりやすく解説し、いじめや虐待などから自分自身を守るための方法をつづった本です。その作者の山崎聡一郎さんは、教育研究家として「法教育によるいじめ問題解決」をテーマにずっと研究を続けられています。そこで、その山崎さんの著書の中から自身のいじめに関する体験を紹介します。

山崎さんは、小学校5年生の時、仲の良かった友だちがいじめられているのをかばったことで、自分もいじめの標的になりました。この時のクラスは、テスト中でも歩きまわるなど、いわゆる“荒れた状態”だったそうです。いじめは、6年生になっても続き、毎日のように暴力的な攻撃を受けました。その体験は、「大人になっても決して忘れられない、自らの人格形成のうえでも深い傷になっている」と語られています。正義感から勇気を出してとった行動が、いじめや暴力というかたちで返ってきたこと、まわりの人たちがいじめを止められなかったことに憤りとやるせなさを感じざるをえません。

ところが、その山崎さんが、中学校でいじめの加害者になってしまったのです。囲碁部で部長を務めていた3年生の時、後輩部員とトラブルになりました。そこで、その解決策を考えるためにみんなで話し合うこととし、その子に声をかけましたが、とうとう話し合いの場には現れず、そのまま「退部してもらおう」という結論を出してしまったのです。しかし、勝手に退部扱いにされたその子は、「いじめがあった」として先生に相談し、学校でも大きな問題となったのです。いじめでつらい思いをした自分が加害者になったという事実は、いじめの被害経験よりも衝撃的であったそうです。

この原因は、「自分が受けたいじめのような行いは一切しておらず、『これくらい、いじめではないだろう』と知らず知らずのうちに思い込んでいたことにある」と語っています。幸いその子に許してもらうことができ、もとの関係に戻れたそうですが、その後は自分が加害者になっていないか常に意識し、チェックしてもらうようにしているそうです。その上で、「自分の基準で他人のツラさを測らないで！」と訴え続けています。



『10代の子に伝えたい 学校で悩む ぼくが見つけた 未来を切りひらく思考』
(山崎聡一郎著・朝日新聞出版)

きっと未来は変えられる！！

ギタンジャリ・ラオさんという2005年アメリカ生まれの若き科学者をご存じでしょうか。ラオさんは、11歳の時、水道の鉛汚染に苦しむ人々を助けようと、鉛汚染探知装置を発明し、「アメリカで最も優れた若き科学者」に選ばれました。さらに、15歳の時、AI(人工知能)技術を使って、新たな問題となっている「ネットいじめ」を予防するアプリ「カインドリー」を開発し、2020年にアメリカの『TIME(タイム)』誌で、初の「キッズ・オブ・ザ・イヤー(その年に最も影響力のあった子ども)」にも選ばれました。

「カインドリー」というのは、いじめに使われる可能性のある単語をネット上で送ろうとしていると、AIがその言葉を見つけて別の言葉に直すように提案するアプリなのです。このアプリについて、ラオさんは若者に次のように語りかけます。

「私たちって、つい人の悪口を言ってしまう傾向がある。だからこそ(このアプリは)あなたたちに、『今、言葉にしようとする内容』を考えさせるチャンスをお返し与えてくれるの。そうすればあなたが、次に何をしたらいいか考えられるでしょう。」

また、ラオさんは、「誰かを幸せにするのが、私の毎日の目標」と熱く語り、「社会問題を解決するには、STEM(科学・技術・工学・数学の英語の頭文字をとった学問領域)を利用したイノベーション(改革)が重要」として、自らの著書でその方法等を紹介しています。そして、「まわりの大人は、子どもの好奇心と一歩踏み出した子どもたちをサポートしてください」と呼びかけています。

みなさんは、ラオさんの考え方や取組をどのように感じられるでしょうか。ラオさんのように、高度な知識や技能を要することは誰にでもできることではありません。しかし、私たちの未来をよりよいものに変えていこうと、自分にできることを探し、得意なことを生かして果敢に挑戦する姿に心動かされます。



「STEMで未来は変えられる」
ギタンジャリ・ラオ著(くもん出版)

みんなで声をかけあい、勇気を出していじめをなくしていきましょう。



三木市子どもいじめ防止センター

電話: 0794-82-8110

相談日 月曜日～金曜日

ijime_boshicenter@city.miki.lg.jp

